

## 復活の使信（その2）

—復活のイエスの顕現—

松 田 央

### **The Message of the Resurrection (2)**

—The Appearances of the Risen Jesus—

**MATSUDA Hiroshi**

#### **Abstract**

The faith of Jesus' Resurrection in the early Christian church was formed by the events that the risen Jesus appeared to his disciples. The most explicit grounds for believing in Jesus' Resurrection, where these are given in the New Testament, are that he appeared to many people. Namely the appearances of the risen Jesus are the most explicit grounds to realize the faith of Jesus' Resurrection. Therefore the essence in the message of the Resurrection in the Christian church is the appearances of the risen Jesus, and the disciples' witnesses concerning these appearances are worth believing enough from three main grounds.

There are indeed discrepancies among some reports of the persons to whom the risen Jesus appeared first and the places where he appeared in four Gospels and Paul's letter (1 Corinthians). By the way there is no report of the place of the appearance in Paul's all letters. But these discrepancies cannot be the ground with which to deny the historicity of the appearances of the risen Jesus. However according to my view the reports concerning the appearance of the risen Jesus in Galilee contain evangelists' theological thoughts as well as the pure fact.

The evangelists proclaim clearly that the risen Jesus had a concrete body. This resurrected body is not simply same one as his body during his lifetime but consists of the heavenly one and earthly one. These two are in both relations of the continuity and the discontinuity.

**キーワード：**イエスの顕現、顕現の史実性、顕現の対象と場所、具体的な体、弟子たちの疑い

**Key words:** the appearances of Jesus, the historicity of the appearances,  
the object and place of the appearances, the concrete body, disciples' doubts

### Ⅲ 復活信仰の根拠

前回の論文でも指摘したように、初期キリスト教会の復活信仰は、イエスの弟子たちの想像や観念によって造り出されたものではなく、復活したイエスが弟子たちの前に出現するという出来事によって成立した<sup>(1)</sup>。この出来事を「復活のイエスの顕現」あるいは「復活顕現」と呼ぶ。ここでは便宜上、「復活顕現」と名づけておく。

ちなみに宗教哲学者リチャード・スウィンバーンの解釈によれば、イエスの復活を信じるための最も明白な根拠は、新約聖書の中に残されているが、それは復活のイエスが多くの人々に現れたこと、あるいは多くの人々によって見られたことである<sup>(2)</sup>。つまり、復活顕現が復活信仰を成立させるための最も明白な根拠であるということである。たとえば、最古の復活伝承に基づき、かつ教会による定型化された信条であると思われる第一コリント書15章3節以下で使徒パウロは、「キリストは三日目に復活し、ケファ（ペトロ）に現れ、その後十二人に現れた」と書いている。原典のギリシア語のテキストでは「現れた」に相当する単語は「オーフセー」ὤφθηである。

カール・バルトの解釈によると、「現れた」（オーフセー）ということは、キリストが自分自身を明らかに示した、彼が真実なることを証明した、彼が自ら証言を立てた、ということである。しかもこの顕現の目撃の仕方についてのあらゆる表象は、遂行不可能である<sup>(3)</sup>。

すなわち、バルトの解釈に従うと、ここでは「現れた」という事実および現れた主語がキリストであるということが重要である。「現れた」ということだけが、使信の内容なのである。言い換えれば、私たちの罪のために十字架で死んだキリストが生きているということが使信の内容なのである。この出来事だけが弟子たちを立ち直らせ、また今日の私たちの実存（死ぬべき有限性）を確実に生かすのである。つまり、復活して永遠の命そのものになったキリストだけが、わたしたちを永遠に生かすのである。

ところで「オーフセー」（現れた）は受動態のアオリスト（過去形的一种）である。原形は「ホラオー」ὁράω（見る）という動詞であり、直訳すれば、「見られた」とも訳せる。そこで視点を変えれば、ペトロをはじめとしてイエスの弟子たちは、復活したイエスを「見た」という意味に解釈することも可能である。

ただし、弟子たちがイエスを「見た」ということだけに関心が集中してしまうならば、その解釈は本来の使信から逸脱する危険性ははらむことになる。というのは、バルトがいうように、弟子たちがどのような方法でイエスの顕現を目撃したのかという表象的・現象的側面に注意が向けられてしまうからである。そうすると、畢竟するに弟子たちは神秘的な経験においてイエスの幻影を見たのではないかというような無用な憶測を引き起こすことになる。その結果、復活顕現は今日の私たちには何の関係もない、単なる伝説になってしまう。

この場合、弟子たちがイエスを「見た」ということは、彼らだけに了解された特殊な神秘的経験（幻視など）や弟子たちの悔い改め（立ち直り）に関する解釈を意味するのではない。復

活顕現に関する限り、そのような解釈論的な記述は、新約聖書のどこにも認められない。むしろここではイエスが彼らの前に「現れた」ということが、出来事として端的に素朴に報告されているのである。そのことを信じるかどうかは別として、少なくとも原始キリスト教の人々は、そのような意図で聖書を書いているのである。そして、復活信仰が可能になるかどうかは、このような著者の意図を正しく理解できるかどうかということにかかっている。

さらにいうならば、イエスの弟子たちによる復活の使信は信じるに値する。それはなぜかというと、第一に彼らは主の復活を全く予期していなかったのだから、彼らの復活信仰が幻想や想像の産物であるということは明確に否定される。たとえば、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリアなどが天使から聞いた復活の使信を弟子たちに知らせたとき、彼らは「この話がたわ事のように思われたので、婦人たちを信じなかった」（ルカ 24:9-11）。またマタイの報告（28:16-17）によると、弟子たちはガリラヤの山で復活したイエスに出会い、イエスを礼拝した。ところが、新共同訳聖書では「しかし、疑う者もいた」と書かれている。ギリシア語の原文を翻訳すると、「彼らは疑った」と訳すことができる。すなわち、一人の弟子だけが疑ったのではなく、少なくともその場にいた複数の弟子たちが疑ったということである。またルカの報告（24:37）によると、復活のイエスが弟子たちの前に出現したが、彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。彼らは復活のイエスを見たのにもかかわらず、復活の事実を疑ったのである。

復活のイエスに出会った弟子たちが、復活の事実を疑ったということは、イエスの復活が弟子たちの期待や願望の次元を超越していたということを意味する。復活の顕現の出来事なしには、復活信仰というものは決して成立しなかったのである。

第二に弟子たちの立ち直りと勇敢な伝道の展開という事実である。彼らは地上のイエスに対しておそらく政治的なメシア像を思い浮かべていた。それゆえに、イエスが逮捕され、処刑されたとき、彼らはイエスにつまずいたのである（マルコ 14:43-52）。しかし、復活のイエスとの予期せぬ再会により、弟子たちは、イエスが政治的な解放者ではなく、普遍的な解放者（罪と死の力からの解放者）であることに気づいた。そして彼らは、文字通り命を賭けて、イエスこそが神の子キリスト（メシア）であるということを伝道し始めた（使徒 2:24, 32-36）。しかも彼らのほとんどは、殉教したと伝えられている。

仮に彼らが故意に虚偽の宣伝を行ったとすれば、いったい何のためにそのような危険を冒す必要があったのか。当時、キリスト教徒は激しく迫害されていたから、キリストの復活を告知することは、彼らに何の利益ももたらさなかったのである。福音の伝道に生涯を捧げたという彼らの生き方そのものに復活信仰の真実さが示唆されている。

第三にパウロが復活の伝承を聞いたとき、復活の証人の大部分はまだ生き残っていた（第一コリント 15:6）。つまり、復活の事実を疑った人々は、復活の証人に会って、直接その真偽と確かめることができた。おそらくパウロもそうしたと考えられる。その結果、疑いの余地はなかったということである。

第四にイエスの弟ヤコブも復活信仰を持ったという事実がある。初期の伝承によると、復活したキリストはヤコブにも現れた（同 15:7）。福音書の記事によると、イエスの家族（身内の

者)は生前のイエスの行動に好意的ではなかった(マルコ 6:4; ヨハネ 7:5)。それどころか、イエスの行動を妨害しようと試みたこともある(マルコ 3:21)。したがって、ヤコブも地上のイエスをメシアとして信じていなかったと考えられる。そのようなヤコブが復活顕現を信じたということは、復活顕現の事実性を証明している。彼は初代教会において重要な位置を占めていたらしい(使徒 15:13-21; 21:18; ガラテヤ 2:9)。それは彼が復活の証人であったからである。

## IV 復活顕現の内容

### 1 全体的考察

イエスが最初に誰にどこで現れたのかという点に関しては、四つの福音書において説明が一致していない。たとえば、最初の復活顕現の対象は、マタイによる福音書(以下マタイ福音書と省略)ではマグダラのマリアともう一人のマリアであり、ヨハネによる福音書(以下ヨハネ福音書と省略)ではマグダラのマリアであり、ルカによる福音書(以下ルカ福音書と省略)ではペトロであるとされる(ただし、ルカ福音書では最初の復活顕現は物語として報告されていない)。なおマルコによる福音書(以下マルコ福音書と省略)では復活顕現の物語は現存する古い写本では欠落している(16章9-20節は後代の人による付け足しである)。また復活顕現の場所は、マタイ福音書ではエルサレム周辺(イエスの墓の近辺)とガリラヤであり、ルカ福音書ではエルサレム(またはその周辺)とエマオ途上の地域、ヨハネ福音書ではエルサレム(またはその周辺)とガリラヤである。

先ほど論述したように、復活のキリストが「現れた」(オーフセー)ということだけが使信の内容であるとすれば、顕現の対象や場所は二次的な事柄であり、伝承段階における付加または福音書の著者による編集的な設定にすぎないというように割り切って考えることも可能であろう。

しかし、パウロが利用している教会の初期の伝承では、「(キリストは三日目に復活して)ケファに現れ、その後十二人に現れた」(第一コリント 15:5)となっている。さらにパウロは「次いで、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。そのうちの何人かは既に眠りについたにしろ、大部分は今なお生き残っています。次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ、そして最後に、月足らずで生まれたようなわたし(パウロ)にも現れました」(同 15:6-8)と報告を続けている。

ここでは確かに顕現の場所に関する言及はないが、顕現の対象、言い換えれば、イエスの目撃者が明確に記述されている。それはおそらく復活顕現の具体的な現象内容(顕現したイエスの容姿、言葉、行動および顕現の場所など)は問題になっていないにせよ、顕現の目撃者は使信の内容になっているということを意味する。復活顕現が具体的な出来事であったということを前提にする限り、そのことは当然であろう。

したがって、もしも復活顕現がイエスの復活を信じるための最も明白な根拠であり、かつ復活の使信の中心的内容であるならば、顕現の対象や場所は重要な問題になってくるはずである。そして仮に各福音書において復活顕現の記述に矛盾や齟齬が認められるとすると、その根

底にある歴史的事実性そのものが疑われることになる。

## 2 顕現の対象

まず顕現の対象について検証する。四つの福音書の記述に共通していることは、マグダラのマリヤがイエスの墓を訪れて、復活に関する情報を受けているということである。さらにマタイ福音書によると、彼女は天使からイエスの復活の告知を聞き、その直後にイエス自身に出会っている。

マルコ福音書によると、彼女は天使からイエスが復活したことおよびガリラヤにおいて弟子たちがイエスに出会うことができるという預言を聞いている（16:6-7）。ところで、現存するマルコ福音書の古い写本（16章8節で終わっている）には復活顕現の記事はないが、おそらく本来は復活顕現の記事があったと推測される。16章8節では「婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである」と書かれている。仮に本来の福音書がこの節で終わっていたとすれば、彼女たちは弟子たちに何も伝えなかったことになるから、弟子たちはガリラヤでイエスに会えなかったことになる。そうすると、天使が彼女たちに使信を伝えた意味がなくなってしまう。マルコがそのようなことを意図したはずはない。

しかもイエスは生前、「しかし、わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く」とガリラヤでの復活顕現を約束している（マルコ 14:28）。したがって、本来は16章8節のあとに復活顕現の記事があったという可能性が高い。この考え方に基づいて、後代の教会は三つの復活顕現の記事を付け加えている（同 16:9-18）。ちなみに16章9節では「イエスは週の初めの日の朝早く、復活して、まずマグダラのマリヤに御自身を現された。このマリヤは、以前イエスに七つの悪霊を追い出していただいた婦人である」と書かれている。

またルカ福音書によると、彼女は天使から復活の使信を聞いて、その使信を弟子たちに伝えている（24:5-11）。ただし、彼女自身は復活顕現を経験していない。

ヨハネ福音書の復活物語では、女性の中ではマグダラのマリヤだけがイエスの墓を訪れ、彼女は弟子たちよりも先に復活したイエスに出会った（20:1-18）。

以上の検証から推測できることは、スウィンバーンが主張しているように、おそらくヨハネ福音書の記事が最も古い伝承を残しているということである<sup>(4)</sup>。マルコ福音書の補遺の記事も同じ伝承に基づいているのだろう。すなわち、マグダラのマリヤはイエスの墓が空であることに気づき、しかも墓の近くで復活のイエスに出会ったという伝承が最初にあったのだろう。その際、もう一人のマリア（おそらくヤコブの母マリア）とほかの女性たち（サロメ、ヨハナなど）も一緒に墓を訪れ、空の墓を見たという可能性が高い。

ところが、伝承の発展の過程において復活のイエスが二人のマリアに現れたということになってしまった。また最初の伝承段階では、おそらくマグダラのマリヤだけが復活の使信を弟子たちに伝えたということになっていたのであるが、のちに複数の女性たちがこの使信を弟子たちに伝えたということになったのだろう。

もっともこの仮説には一つの問題点が残る。パウロが利用している初期の伝承では、復活し

たキリストは「ケファ（ペトロ）に現れ、その後十二人に現れた」となっているから、ここでは最初の復活の証人はペトロであるということが主張されている。しかもこの伝承ではマグダラのマリアについての言及はない。

またルカ福音書でも復活したイエスは、マグダラのマリアに現れていない。そして「十一人とその仲間が集まって、本当に主は復活して、シモン（ペトロ）に現れたと言っていた」（ルカ 24:33-34）と書かれている。小河陽が説明しているように、この記事は、ペトロへの顕現が最初であったということを明瞭に示唆している<sup>(5)</sup>。ただし、ペトロに対する最初の復活顕現の物語は伝承段階において失われてしまった。

そこで小河陽の解釈によると、マグダラのマリアへの顕現の記事は、文献学的また伝承的には明らかに二次的な物語であるということになる<sup>(6)</sup>。しかし、私見によると、マグダラのマリアへの顕現の記事は単なる二次的な物語であると決めつけてしまうことはできない。

それはなぜかという、第一に三つの福音書がイエスの復活の証人としてわざわざ女性を登場させているということである（現存するマルコ福音書の古い写本では彼女たちの証言は欠落している）。古代イスラエルの法律では、女性には法律上の証人となる資格が認められていなかった。つまり、当時の社会通念では彼女たちを証人として描くことは得策ではなかったはずである。そのような女性差別の時代に福音書の著者たちが男性の弟子たちではなく、ガリラヤの女性たちを復活の証人として位置づけているのはなぜだろうか。その答えは明白である。つまり、彼女たちこそが真の復活の証人であり、使徒たちもそのことを否定することができなかったからである。もし反対に彼女たちの証言が後代の教会の創作であったとすれば、なぜ証拠能力の認められない証言をわざわざ持ち出したのかを説明することができない。

第二にマルコ福音書16章9節（のちの教会による補遺）では「イエスは週の初めの日の朝早く、復活して、まずマグダラのマリアに御自身を現された」と書かれている。またヨハネ福音書でもマグダラのマリアは、最初に復活のイエスを見ている（ヨハネ 20:11-18）。これら二つの記述は、イエスが男の弟子たちにまず現れるという預言（マルコ 16:7）およびイエスは最初にペトロに現れたという初期の伝承（ルカ 24:33-34；第一コリント 15:5）と矛盾する。またマルコ福音書の補遺を書いた人物およびヨハネ福音書の著者がルカ福音書の記事を知っていたということは十分考えられる。

もしもマグダラのマリアへの顕現が教会の創作であるとすれば、福音書の著者たちが何のために天使の預言（イエスはまずガリラヤで弟子たちに現れるという内容）や初期の伝承と矛盾する記事をわざわざ挿入しているのかを説明することができない。そのようなことをすれば、復活物語全体の信頼性を損なうことになるということに彼らは気づいていたはずである。この疑問を解消する答えは、ただ一つである。すなわち、マグダラのマリアへの顕現が歴史的事実に基づいていたということである。

ちなみに聖書学者ウルリヒ・ルツの釈義によれば、一人の婦人への顕現は、顕現の名誉を当然のようにペトロや使徒たちに与えているという制度としての教会を支配している傾向に矛盾し、まさにそのゆえに多分古い伝承に基づいている<sup>(7)</sup>。

古代のカトリック教会の伝承によると、キリストはペトロを代表とする使徒たちにキリスト

の福音の伝道および教会の管理という権威を授けた(マタイ 16:18-19; 28:18-20; ヨハネ 20:22-23; 使徒 1:8)。これに対して、マグダラのマリアをはじめとする「ガリラヤの婦人たち」の権威は、古代のカトリック教会において認められていない。そこで福音書の著者が、単に復活の証言を権威づけるためにマグダラのマリアに対する顕現の記事を書いたはずはない。マタイやヨハネはこの顕現の記事が古い伝承に基づいていて、史実的な内容を含んでいることを確信していたから、どうしてもこの記事を残したかったに違いない。

そして、塚本虎二が解釈しているように、ペトロに対する顕現の伝承とマグダラのマリアに対する顕現の伝承は全く関係のない二つの資料であり、両者ともに生きた歴史的事実を伝えているものと見るほかはない<sup>(8)</sup>。つまり、二つの資料は全く別個の源から生じた伝承であり、教会において競合していたと考えるほかはない。そして、復活顕現の最初の証人がペトロなのかそれともマグダラのマリアなのかということは、もはや歴史的には<sup>せんめい</sup> 闡明できないのである。

### 3 顕現の場所

弟子たちに対する復活顕現の場所は、マタイ福音書ではガリラヤ、ルカ福音書ではエルサレム（またはその周辺）とエマオ途上の地域、ヨハネ福音書ではエルサレム（またはその周辺）とガリラヤである。なおマルコ福音書の場合、天使の預言としてイエスはガリラヤで顕現することになっている（補遺の記事では顕現の場所はエルサレムであることが暗示されている）。果たしてイエスは実際にはどこで弟子たちに現れたのであろうか。それとも復活顕現の場所の記述は福音書の著者の神学的な意図によるもので、事実性に欠けるものなのであろうか。

まず復活顕現の場所に関するすべての記述が福音書の著者の神学的な意図によるものにすぎないという解釈は受け入れられない。たとえば、マタイ福音書の場合、天使は復活したイエスがガリラヤで弟子たちに顕現することをマグダラのマリアともう一人のマリアに告げる（28:7）。彼女たちは墓を立ち去り、天使の使信を弟子たちに知らせるために走って行った（28:8）。すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と挨拶をしたので、彼女たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した（28:9）。さらにイエスは「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる」と語った（28:10）。果たして十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスに再会し、彼を礼拝した（28:16-17）。

ここで確かにガリラヤ顕現の記述は、何らかの意味で神学的な使信を含んでいると考えられる。マタイにとってガリラヤは特別な象徴的意味を持っている。そして、イエスがわざわざ現れて、すでに告知されている「ガリラヤ行き」を彼女たちに告げるということは、神学的使信を強調するためだろう。

しかし、天使によってガリラヤ顕現が予告されているにもかかわらず、その直後に墓の近く（エルサレム周辺）でイエスが二人のマリアに現れるというのは、物語の展開としてはあまりにも奇妙であり、不自然である。

もしもマタイ福音書の復活顕現物語が純然たる神学的な使信にすぎないとすれば、28章9-10節の記事は、天使の告知である「ガリラヤ行き」の使信に矛盾する別の神学的使信が挿入さ

れていると解釈するほかはない。しかし、それでは「ガリラヤ行き」という神学的な使信の価値は損なわれてしまう。マタイがそのような意図を持っていたとは考えられない。

おそらくマタイはそのような批判を受けることは予測していたに違いない。それではなぜこの記事を挿入したのか。おそらく墓の近くで、つまり、エルサレム周辺でイエスがマグダラのマリアに現れたという伝承が当時、重視されていて、マタイがこの伝承をどうしても残しておきたかったと推測しうる。言い換えれば、この記事はマタイにとって神学的な内容を持たず、純然たる事実であったに違いない。

またルカ福音書の「(二人の弟子が)エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた」(24:33-34)という記事も史実的な痕跡を残している。もしもこの記事がルカあるいは教会による虚構であったとしたら、このような中途半端な文章にせずに、彼らは想像力によってペトロへの顕現に関する物語を創作したはずである。しかし、小河陽が論考しているように、彼らは単純にその物語を知らなかったから、語ることをしなかったのである<sup>(9)</sup>。つまり、ここに福音書の著者および教会の誠実さを認めることができる。

ここで最小限度、確定できる史実を指摘しておく。まずすでに論考したように、マタイ福音書およびヨハネ福音書の記事によると、イエスは墓の近く(エルサレム周辺)でマグダラのマリアに現れた。また最古の復活伝承に基づいていると思われる第一コリント書15章3節以下によると、復活したキリストは最初にペトロに現れた。この伝承はルカ福音書24章34節に痕跡を留めている復活の伝承と一致する。復活顕現の場所はやはりエルサレム(またはその周辺)であった。ほかの弟子たちに対する顕現の場所も同様であろう。ちなみに最初にガリラヤ顕現があったという学説があるが<sup>(10)</sup>、以上の理由によりこの学説には同意できない。

したがって、最初の復活顕現がマグダラのマリアに対するものか、それともペトロに対するものかは不明であるが、いずれにせよ、その場所はエルサレムまたはその周辺であったということになる。そこで仮にガリラヤ顕現があったとすれば、それはエルサレム顕現のあとに起こったことになる。

ところで塚本虎二は、「この故に今日の学説では本節をもって、弟子たちが14章27-28節の預言通りガリラヤに逃げて行った醜態をかくすために後人が筆を入れたのであると見るか、あるいは(イエスが)ガリラヤに弟子たちを連れて行って神の国を建てようとした試みが失敗した痕跡であろうという」<sup>(11)</sup>と論述している。

一番目の学説における「本節」とは、「さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と」(マルコ 16:7)という天使の使信を指している。この学説によると、ガリラヤ顕現は史実ではなかったということになる。しかし、この学説は、イエスの死後まもなくエルサレムにおける復活顕現があったという伝承を無視している。また弟子たちがガリラヤに逃避して、その後エルサレムに戻って、復活顕現があったという仮定も、エルサレムとガリラヤとの間の距離を無視しているから、やはり成立しない。エルサレムからガリラヤ南部まで約90キロメートルの距離があるから、弟子たちがそのように短期間で移動することはほとんど不可能で



ある。

二番目の学説によると、復活顕現はエルサレムで起こり、イエスはそこから弟子たちをガリラヤに連れて行ったということになる。ところが、この学説に従うならば、復活したイエスはガリラヤで伝道を行うことを弟子たちに指示したが、その試みは失敗し、イエスは昇天した。そして結局、弟子たちはエルサレムで教会を建てたということになる。しかし初代教会はガリラヤではなく、エルサレムで成立した（使徒 1:3-8, 12-14；2:1-13；ガラテヤ 1:18-19）。もしもガリラヤ顕現が事実で、ガリラヤで教会が成立したとすれば、弟子たちはガリラヤの教会を放棄し、すぐにエルサレムに戻って別の教会を建てたということになる。やはりこの仮説も現実的ではない。

ちなみにスウィンバーンは、次のような仮説を立てている。「最初にイエスの墓の近くで、またはそこでマグダラのマリアへの顕現があった（マタイ福音書、マルコ福音書の補遺、ヨハネ福音書）。それからエマオ途上における二人の弟子たちへの顕現があり（ルカ 24:13-32）、それからペトロへの顕現（ルカ 24:33-34；第一コリント 15:5）とほかの弟子たちへの顕現（第一コリント 15:5）があった。これらすべてはエルサレムで起こった。また生前のイエスのガリラヤ伝道により彼の弟子になった人々の大半は、イエスと共にエルサレムに上らず、ガリラヤに留まった。そこで復活したイエスは、エルサレムでの顕現ののちに、ガリラヤの弟子たちにも現れた。復活のイエスが十二人に現れたのちに五百人以上の人々に現れたというパウロの証言（第一コリント 15:5-6）およびヨハネ福音書21章におけるガリラヤ顕現の記事は、この出来事を反映している」<sup>(12)</sup>。

この学説に従うと、エルサレムとガリラヤの間の距離的な問題を無理なく説明することができる。またマタイ福音書、マルコ福音書、ヨハネ福音書においてガリラヤ顕現の記事がわざわざ書かれている理由をある程度論理的に説明することができる。

そこでこの学説を前提にして議論を進めると、ガリラヤ顕現はペトロをはじめとする十二使徒以外の弟子たちに対する出来事であったが、福音書の著者はそれを十二使徒を含む弟子たちに対する出来事として改変し、復活の記事にしたということになる。いうまでもなくそれは彼らに特定の神学的な意図があったからである。果たしてそれは何であるのか。ここではマタイ福音書に限定して、その神学的な意図について考察する。

#### 4 ガリラヤでの顕現

マタイにとってガリラヤという地名は特別な意味を持っている。イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムで生まれた。しかし、ヘロデ王に殺されそうになったので、イエスの両親は幼子のイエスを連れて、エジプトに避難する。そして、ヘロデ王が死んだのち、ガリラヤ地方に引きこもり、ナザレという町に住んだ。彼らの行動は神の意志に基づくものであった（マタイ 2:1-23）。また洗礼者ヨハネが活動を開始したとき、イエスはユダヤ地方にいたと思われるが、ヨハネが逮捕されると、再びガリラヤに退いてカファルナウムという町に住んだ（同 4:12-13）。マタイによると、これらの一連の行動はやはり神の計画と意志によるものであった。

それは、預言者イザヤ (8:23-9:1) を通して言われていたことが実現するためであった。「ゼブルンの地とナフタリの地、湖沿いの道、ヨルダン川のかなたの地、異邦人のガリラヤ、暗闇に住む民は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が射し込んだ」。

そのときから、イエスは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた (マタイ 4:14-17)。

マタイの見地によると、ガリラヤは異邦人の住む暗闇の世界であった。そのような世界にイエスが現れて、福音を告げ知らせることにより、神の光が差し込んだ。ガリラヤの住民の大半は、ユダヤ人であったが、マタイはあえてガリラヤを異邦人の土地として位置づけている。ガリラヤは海拔の高いところと低いところに分かれるが、海拔の低いところでは高度なヘレニズム文化が浸透していたといわれている。またユダヤ教だけではなく、世界的な視野を持った宗教も存在していたようである。

したがって、「異邦人のガリラヤ」という言い回しは、当時のガリラヤの文化的な雰囲気を表現したものであるといえる。そして、マタイの見解によると、イエスはこの世の権力や権威との軋轢を避けて、そのような土地に退いた。ここで「アナコーレオー」ἀναχωρέω (退く、立ち去る) という単語がキーワードになっている。すなわち、ガリラヤは神との交わりを経験する世界であり、読者もイエスと共にこの世界に「アナコーレオー」することが求められている。

またイエスが十字架の上で息を引き取ったとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、聖徒たちが復活するなど多くの奇跡が起こった。それを見ていたローマの百人隊長は非常に恐れ、「本当にこの人は神の子だった」といった (同 27:50-54)。百人隊長は神の救いを受ける異邦人の代表となっている。そこで「異邦人のガリラヤ、暗闇に住む民は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が射し込んだ」というイザヤの預言は、イエスの十字架と復活によって成就した (聖徒の復活はイエスの復活の予兆である)。このように「ガリラヤ」は、イエスによって救われる異邦の世界を指している。

さらにいうならば、マタイは、「ガリラヤ」という言葉によって、復活の世界を表現しようとしていたように思われる。イエスはガリラヤで弟子たちに復活の姿を現した。ガリラヤはイエスの復活を経験する場所であり、神の国を映し出す世界である。言い換えれば、ガリラヤはこの世俗の世界と永遠の神の国をつなぐ通路のようなものがあるといえる。このように考えると、少なくとも復活顕現の場所である「ガリラヤ」とは、イスラエルの特定の地方ではなく、普遍的・観念的な世界を指しているといえる。すなわち、イエスの復活を確信するキリスト者にとって今住んでいる場所がガリラヤであり、復活したイエスと出会う場所なのである。

そして、天使は「イエスは弟子たちよりも先にガリラヤに行かれる」と告知している。イエスは、私たちの人生の先駆者である。イエスは私たちよりも先に十字架の苦難を受け、死を経験し、そして復活した。使徒パウロは「キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました」 (第一コリント 15:20) と述べている。イエスは歴史上で最初に復活を経験した。しかもイエスは自分の復活によって人間の復活への道を切り開いた。ここにキリストの最も素晴らしい恵みがある。

それゆえ、イエスの復活を信じるということは、私たちの人生の前方にいつもイエスが存在しているということを信じるということである。マタイは、この世に執着して埋没するのか、それともイエスが現れるガリラヤを目指すのかということを私たちに問いかけている。私たちは日常世界でガリラヤをいつも思い起こし、この世界に「アナコーレオー」する（退く）習慣を身につけねばならない。

私たちはこの世で肉体を持ったイエスに出会うことはできない。しかし、この世に執着せず、神の国を目指した人生を歩むことによって、私たちの人生の道のりそれ自体がガリラヤになる。この道のりのひとつひとつの地点に復活したイエスが先に到着している。

## V 復活顕現における二つの論点

### 1 復活したイエスの体

福音書の復活顕現物語において復活したイエスは、どのような存在として現れているのか。イエスは具体的な体を持っているのだろうか。それに関して、マルコ福音書の補遺の記事には明確に記述されていない。

マタイ福音書によると、二人のマリアはイエスと出会って、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した（28:9）。「ひれ伏す」の原語は「プロスキュネオー」προσκυνέωである。この単語は、人間に対する場合（使徒10:25）にも用いられるが、原則として神または超自然的存在に対する尊崇や礼拝を表現する（織田昭編『新約聖書ギリシャ語小辞典』改訂第4版）。

それゆえ、ここではルツが解釈しているように、二人のマリアは復活したイエスを神的存在として「礼拝した」ということが報告されている<sup>(13)</sup>。すなわち、復活者との出会いは、神的存在との出会いを意味する。復活者イエスは二人のマリアに「恐れるな」と語りかけている（マタイ28:10）。人間は神的存在であるイエスとの出会いによっておそれと不安から解放される。

ただしルツは、「二人のマリアはイエスと出会って、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した」というマタイ福音書の記事において、ヨハネ福音書20章24-29節やルカ福音書24章36-43節の記事のように、復活者の身体性が強調されているわけではないと述べている<sup>(14)</sup>。

なるほどルツの解釈が正しいのかもしれない。しかし、二人のマリアは「イエスの足を抱いた」のであるから、ここでは当然、イエスが具体的な体を持っていたということが示唆されている。マタイにとっても、復活者が具体的な体を所有していたということは復活物語における大前提の事柄である。

そのことは墓が空であったという記事からも認められる。四つの福音書はいずれもイエスの墓が空であったということを明確な事実として強調している（マタイ 28:5-6；マルコ 16:6；ルカ 24:5-6；ヨハネ 20:5-7）。また使徒言行録ではイエスの墓が空であったことは明確に言及されていないが、「彼（キリスト）は陰府に捨てておかれず、その体は朽ち果てることがない」という言葉は、墓が空であったということを暗示している（2:31）。

ここからわかるように、新約聖書の復活論においてイエスの復活と墓が空であることは相即不離の関係にある。そのことは当時の教会の重要な二つの共通認識を表現している。すなわち、第一におそらくイエスの弟子たちを含めて初代教会の人々が、イエスの遺体をどこにも見いだ

さなかったということである。これは弟子たちの復活理解によるものではなく、純然たる事実そのものであるということを指している。もしもイエスの墓が空っぽでなかったならば、イエスの敵はイエスの遺体を示して、弟子たちの伝道を挫折させることができたはずである。したがって、史実としてイエスの墓は空っぽであったということを受け入れた方が自然であり、また解釈として明快である<sup>(15)</sup>。

第二にロバート・ガンドゥリーが論考しているように<sup>(16)</sup>、当時の教会の信仰によれば、空の墓の記事は、イエスの復活が具体的な体を伴ったものであったということ表現するためのものである。ところが神学者イェルク・ツィンクは、復活物語において空の墓の記事はさほど重要なものではないと主張している。

（イエスの復活に関する）議論はいつも、墓は本当に空であったかどうかという問いをめぐってなされてきました。（中略）人々は一生懸命になって、死んだ後のイエスの出現を思い浮かべようと、このような枝葉末節について論じてきました<sup>(17)</sup>。

前回の論文でも紹介したように、イエスの復活とは単なる蘇生ではなく、イエスが新しい体、すなわち、「霊の体」を持ったということを意味する。したがって、たとえイエスの遺体が墓に残っていたとしても、そのことはイエスの復活を否定する根拠にはならない<sup>(18)</sup>。

しかし当時の教会の人々にとって、空の墓とイエスの復活は相即不離の関係にある。この論点については、すでに前回の論文で詳しく論考しているが<sup>(19)</sup>、さらにいうならば、当時の教会の信仰によれば、イエスの墓が空であったということは、決して「枝葉末節」の議論ではなく、イエスの復活が体を伴うものであったということを主張するために不可欠なものであった。

今日の私たちが新約聖書の復活の記事を理解する際に是非とも注意しなければならないことがある。それは現代的なパラダイムで聖書を読むのではなく、一旦、当時の教会の視点に立つて聖書を読まねばならないということである。その視点とは、キルステン・フクセルが論考しているように、「天の体」（der himmlische Leib）と「地上の体」（der irdische Leib）との関係は連続性と不連続性という両面を持っているという視点である<sup>(20)</sup>。

「天の体」と「地上の体」はパウロの術語である（第一コリント 15:40）。そして、パウロは、「最初に霊の体があったものではありません。自然の命の体があり、次いで霊の体があるのです」（同 15:46）と述べている。いうまでもなく、「霊の体」は天の体であり、「自然の命の体」は地上の体であり、生まれながらの体、つまり、通常物質で構成された体である。霊の体は永遠に朽ちない体であり、復活とはこの体を所有することである。しかし、パウロによると、霊の体は忽然と出現するのではなく、自然の命の体を前提にしている。言い換えれば、最初に自然の命の体という「スベルマ」σπέρμα（種）が蒔かれていて、そこから霊の体が新しく生まれる（同 15:38, 44）。この点において天の体と地上の体との間に連続性がある。

しかし他方で、植物の芽が生えて成長するためには植物のスベルマは死ななければならないように、自然の体は死滅すべきものであり、天国の生活には耐えられない。天国に生きるため

にはそれにふさわしい天の体・霊の体を持つ必要がある。その点において天の体と地上の体との間に不連続性がある。

そして、福音書の復活物語に報告されているイエスの体は、このような天の体と地上の体との関係における両面性を備えたものであると理解しなければならない。これは復活顕現の記事を正しく解釈するための不可欠な条件である。

たとえば二人の弟子がエルサレムから脱出し、エマオへ向かう旅の途中でイエスが彼らの前に出現する。ところが、彼らはそれがイエスであることに気づかない。そして、ある家でイエスがパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いて彼らに渡したとき、二人の目が開けて、イエスだとわかった。しかし、その瞬間、イエスの姿は見えなくなった（ルカ 24:13-31）。

ここで「イエスの姿は見えなくなった」という記述は、イエスの体が天のものであり、地上の体とは異なる（連続していない）ということを表現している。他方で二人の弟子は同行している旅人イエスを全く普通の人間として受け止め、彼と会話をしている。この記述は、イエスの体が地上の体との連続性を持っているということを示唆している。イエスが弟子たちの差し出した魚を食べたという記述も同様に解釈しうる（同 24:41-43）。

またヨハネ福音書にも二つの体の関係における両面性が認められる。たとえば、ペトロがイエスの墓に入ったところ、「イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった」（20:7）という記事がある。もしも誰かが墓に入って、イエスの遺体を盗んだとすれば、遺体を包んだ覆いと亜麻布をわざわざ取り除いてから遺体を持ち去るはずはない。またご丁寧に覆いを丸めておくというのもおかしい話である。したがって、ここでは覆いと亜麻布を取りはずしたのは、ほかならぬイエス自身であったということが強調されている。すなわち、イエスはもとの体を使って復活したということが復活の使信の本質になっている。

さらにイエスは、戸に鍵がかかっていた弟子たちの家に入って彼らの真ん中に出現した（ヨハネ 20:19）。イエスがどのような方法で家の中に入ったのかは不明である。いずれにせよ、伊吹雄が解説しているように、ここではイエスの復活体の超越性が表現されている<sup>(21)</sup>。イエスは全宇宙のどこにでも出現することができる。それはイエスの体の本質が霊であるからであり、この点において復活の体は地上の体とは連続していない。

しかしイエスはその時、弟子たちに手とわき腹を見せた（同 20:20）。これは復活の体が十字架の時に受けた傷の跡を残していることを示唆している。なぜイエスは完全に癒された体によって現れなかったのか。

それは弟子たちの真ん中に立った人物が、ほかならぬ十字架につけられたイエスであることを証明するためであった。この点において地上の体と天の体には連続性が認められる。言い換えれば、復活したキリストの体には霊的な要素と肉体的な要素という二つの側面が認められる。普通の人間にとって肉体を持ったイエスを見ることなしには、霊のイエスを見ることは不可能である。

さらにいうならば、霊の体というものの物質的な要素から構成されている。ただし、その物質はおそらくこの世に存在しているものではなく、天国にのみ存在するものである。そこで復

活とは身体性・物質性の廃棄ではなく、より高度な身体性・物質性への変容(第二コリント 5:1-4) であるといえる。

## 2 弟子たちの疑い

すでに述べたように、復活顕現の出来事なしには、弟子たちの復活信仰は決して成立しなかった。しかし、ここで注意しなければならないのは、彼らの信仰はまだ完全なものではなかったということである。復活信仰には「疑い」の要素が含まれていた。マタイ福音書にはそのことが明確に提示されている。

さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を受け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(28:16-20)。

十一人の弟子たちは、復活したイエスに出会って、ひれ伏した(イスカリオテのユダは自殺した)。すでに言及したように、「ひれ伏す」の原語は「プロスキュネオー」προσκυνέωである。この単語は、原則として神または超自然的存在に対する尊崇や礼拝を表現するから、彼らはイエスを神的存在として「礼拝した」。「しかし、疑う者もいた」。

「しかし、疑う者もいた」の原文はοἱ δὲ ἐδίστασαν (ホイ デ エディスタサン) である。οἱ (ホイ) は男性・複数形の冠詞で「彼ら」の意味である。ἐδίστασαν (エディスタサン) は διστάζω (ディスタゾー) という動詞のアオリスト形(過去形の一つ)で、「疑う」「ためらう」という意味である。

δὲ (デ) は「しかし」という意味である。οἱ μὲν (メン) …οἱ δέ…という文体の場合には「一方は……他方は……」という意味であるが、この場合 μὲν という単語がないので、単に「しかし、彼らは疑った」と訳すほかはない。そうすると、「彼ら」とは十一人の弟子たちすべてを指すのだろうか。

文体として考えると、十一人の弟子たちすべてを指すという解釈と十一人の弟子たちの内の何人かを指すという解釈の両方が可能である。ドナルド・ハグナーは前者を、ルツは後者を主張している<sup>(22)</sup>。しかし、いずれの解釈に従うにせよ、ここで少なくとも弟子たちの何人かは「疑った」という事実が報告されていることに注意すべきである。つまり、疑う者は決して特殊な人間ではないということである。

それでは彼らは何を疑ったのか。疑った者もイエスを礼拝しているのであるから、彼らは目の前に現れた人物がイエスであることを疑っているわけではない。たとえ復活したイエスを見たとしても、復活に関する疑いを完全に捨て去ることはできないということが提示されている。すなわち、「信じる」という行為の中に必然的に「疑う」という行為が含まれていて、人

間は後者の要素を自分の力で排除することができないのである。

繰り返しになるが、イエスを礼拝した者はすべて、イエスがキリスト（メシア）であることを信じた。しかし他方で、復活という空前絶後の出来事に遭遇したとき、それを純然たる事実として受け止めることにためらう者がいたのである。

ところが、イエスはそのような者を非難してはいない。むしろ世に出て行ってすべての民をイエスの弟子にするように命じる。復活の使信を伝える者自身の心に疑いがあるが、そのような疑いは、伝道活動が続けることによっておのずと消え去っていくのである。なぜならば、イエスをキリストと信じることは、人間の能力によるのではなく、聖霊の働きによるからである（第一コリント 12:3）。

## VI 結論

以上二回にわたって「復活の使信」について論述してきた。前回の論文では復活の使信に関する五つの根本的な主題を提示し、その中でなかんずく第二の主題「イエスの復活の現象はそのうちに十字架の現実を含んでいる」について綿密に検討した。十字架と復活は相即不離の関係にある。またイエスの墓が実際に空<sup>から</sup>っぽであったかどうかについても検証し、そのことを事実として尊重すべきであると結論づけた。

今回の論文では復活顕現は復活信仰を成立させるための最も明白な根拠であるということを考察した。四つの福音書における復活顕現の記事には齟齬<sup>そご</sup>が認められるが、それは復活顕現の史実性を否定する根拠にはならない。

また復活顕現の記事は復活のイエスが具体的な体を持っているということを告知している。当時のキリスト者は、そのことを「空の墓」の出来事によって示そうとした。空の墓とイエスの復活は相即不離の関係にあると考えられたのである。ただし、そのことは復活の体は単純にもとの体と同一であるということではなく、「天の体」（復活の体）と「地上の体」とは連続性と不連続性という両面の関係にあるということである。

## 注

- (1) 拙論「復活の使信（その1）」『神戸女学院大学論集』第57巻第1号、2010年6月20日、77ページ。
- (2) Swinburne, Richard, *The Resurrection of God Incarnate*, Oxford: Oxford University Press, 2003, p. 146.
- (3) カール・バルト『死人の復活』山本和訳、新教出版社、2003年、124ページ。
- (4) Swinburne, Richard, op. cit., pp. 153-154.
- (5) 小河陽『パウロとベテロ』講談社、2005年、74ページ。
- (6) 同書、74ページ。
- (7) ウルリヒ・ルツ『マタイによる福音書 26-28章』（『EKK 新約聖書註解 I/4』）小河陽訳、教文館、2009年、506-507ページ。
- (8) 塚本虎二『イエス伝研究第8巻』聖書知識社、1990年、12ページ。
- (9) 小河陽、前掲書、75ページ。
- (10) 高橋三郎『マタイ福音書講義（下）』教文館、1993年、366-368ページ。
- (11) 塚本虎二、前掲書、10ページ。
- (12) Swinburne, Richard, op. cit., pp. 156-158.

- (13) ウルリヒ・ルツ、前掲書、508ページ。
- (14) 同書、507ページ。
- (15) 拙論「復活の使信（その１）」86ページ。
- (16) Gundry, Robert H., The Essential Physicality of Jesus' Resurrection according to the New Testament, in: Craig A. Evans(ed.), The Historical Jesus, vol. 3, London: Routledge, 2004, p.363.
- (17) イェルク・ツィンク『いばらに薔薇が咲き満ちる』宍戸達訳、新教出版社、2001年、370ページ。
- (18) 拙論「復活の使信（その１）」84ページ。
- (19) 拙論「復活の使信（その１）」85-86ページ。
- (20) Huxel, Kirsten, Unsterblichkeit der Seele versus Ganztodthese?, in: Neue Zeitschrift für systematische Theologie und Religionsphilosophie, Bd. 48, Heft 3, 2006, S.354-355.
- (21) 伊吹雄『ヨハネ福音書注解Ⅲ』知泉書館、2009年、415ページ。
- (22) Hagner, Donald A., Matthew14-28: Word Biblical Commentary, vol. 33B, Dallas: Word Books, 1995, p.884. ウルリヒ・ルツ、前掲書、532-533ページ。

（原稿受理 2010年9月17日）